



“観光、教育、循環、自律”

(社)日本技術士会北海道支部／北海道技術士センター
 リージョナルステート研究会 会長
 技術士（建設部門） 市村 一志

1. 全国大会で伝えたいこと

(社)日本技術士会の全国大会では、全国から集まる技術士や札幌市民と共に、技術士（者）の社会貢献のために、何が出来るか何をすべきか、考えていることを率直に出し合い、これからの進むべき方向の参考にすることと、同じく考える同志のネットワークを作りたいと考えています。

「市民との協働」に視点を絞ったのは、我々技術士が社会貢献を考える場合、エンドユーザー（生活者、消費者、利用者）が求めているものに適確にフィットしていることが必要であり、それ無しには社会貢献があり得ないと考えるからです。そのフィットする過程こそ市民との協働なのです。フィットする過程では、私達技術者自身がエンドユーザーになるケースもありますし、エンドユーザーと共に行動したり、支援することもあります。その過程の中にこそ、社会貢献のあり様が見えてくると確信して、我々の活動の考え方と活動を示し、意見を聞きたいと思えます。

「観光、教育、循環、自律」は、ここ4年間活動しているリージョナルステート研究会のテーマですが、分科会では一つの事例として話題提供の取り扱いをし、市民との協働をどのように考え、実行してきたか、率直に話し合い、様々な意見が出されるきっかけにしたいと思えます。

講師には、ボラナビ倶楽部の森田麻美子さんをお願いし、専門分野の方達がどのように社会に係わっているか、具体的な事例で紹介していただくことになっています。

2. ボランティアの意味

全国大会の分科会を進めるにあたって、当研究会の関係者は何回か話し合いをしました。この機会に集まってくれたい全国の技術士の皆さんに何を伝えたいか、何を一緒に考えてもらいたいのか、そのヒントが次のとおりです。それは、「日常の業務をやっていて、“喜び”や“やりがい”を感じる事が少ない。この満たされない心は実感が無いからである。」と言う言葉でした。

私の時代の仕事は、北海道で初めて、誰もやったことが無く、モデルが無いというケースが多く、緊張感とやりがいを感じたものです。良い悪いの結果がすぐに跳ね返ってきました。しかし今は、マニュアルがあって、それに従って進めればそれなりに仕事が出来てしまう時代なのでしょう。自分のやった業務が社会でどう評価されているか、なかなか分かり難い状況という以上に、そこは寸断されているのかもしれない。

何故そうなったのかというシステムの話もありますが、特に若い技術士たちは、“喜び”や“やりがい”を求めてドンドン企業の外に出て行くようになりました。直接エンドユーザーと接触することが、自分（技術や考え）は求められているのか、答えられるのか、どう行動すれば良いのか、相手が感謝しているのか、喜んでいるのか、すぐ自分に跳ね返ってきます。相手が喜んでくれた時の満足感や忘れられないものです。それが実感であり、“喜び”や“やりがい”となり、将来やりたいことへの夢につながってゆくと感ずるのです。業務と切り離し、技術士会の研究会の場が、ボランティアの場としても、活発に活動する背景になっています。

3. 分科会の空間と進め方

分科会の部屋は、机の並べ方を教室タイプにしないで、ラウンドテーブルないしはラウンドチェアにしたいと考えています。部屋全体は、机か椅子を円形に並べ、上座、下座を無くし何処からでも発言の出やすい雰囲気に配置します。

分科会の部屋の入口では、分科会の開催主旨の資料を配り、普段考えていることを、若年、年配、男女、技術士や一般市民など関係無く、自由に意見交換が出来るような空間にしたいと思います。

4. 話題提供する事例

私達は、4年間検討としてきたリージョナルステート研究会の4つのテーマを、事例として適宜折込みながら、意見交換を進めていきます。4つの事例は次のとおりです。

まず「観光」です。観光産業は北海道の主要産業の一つになっていますが、より一層のレベルの高い観光地になるためには次のことが必要と考えました。

- ①多様な道路のネットワーク確立
- ②特色ある広域観光ルートの創造
- ③空港観光情報提供システムの再構
- ④道の駅の活性化

などが提言の内容です。観光については、旅行関連企業、公益法人等が様々なノウハウを持って情報や商品を提供している中で、なぜ技術士がこのテーマに挑戦したか。エンドユーザーである観光者と施設やサービスの提供者に迫れない悩みがありながらも、それでも挑戦する意味がどこにあるのかを、語りたいと思います。

「教育」は、地域の活力は元気な子供たちからと次の目標を定めました。

- ①自然等の大切さを体験しつつ理解力と心の育成
- ②自然科学、科学技術の面白さなどを分かり易く教え、技術者の芽を育てる

教育現場で先生や父兄の理解や協力を得て、教育サポートの実践を積み重ねました。その活動の中で、技術士の存在を認識していただいたことに満足感を感じ、毎年教育サポートの実績が増え、活動の広がりを実感するまでになりました。当日その苦労したこ

と、喜んでもらったこと、子供たちのこと、事例をあげながら発表し、皆さんの意見を求めたいと思います。

「環境」は、これから、持続的な発展社会を形成するために、資源やエネルギーなどの循環する技術とそのシステムを構築する必要があります。様々な分野の中から具体的に生ゴミに焦点を当て、生ゴミの循環システムとその技術を提案しました。第一回目は生ゴミを扱いましたが、次は別のテーマで循環システムの提案に取り組む予定であります。これらは外部に向かって提案をしていきますが、コストを含めて社会システムの中での受け入れが可能か、説得と批判の繰り返しの中から、実のある内容にしたいと考えます。

「自律」は、自律的地域構造の研究から、地域の自主性と自律性を高め、住民の参画を踏まえた地域の発展を目指します。その方針として、

- ①世代にもわたって住み続けられる地域
- ②地域内の既存集積の活用による循環型経済
- ③地域の自然形態系との調和

を挙げ「下川イニシャティヴ」を提案しました。「下川イニシャティヴ」は、町の経営林におけるCO₂排出権（売買）の取引に関する問題提起で、都市が排出という受益の対価を地方に支払うべきではないかということです。都市側は、都市で徴収される税金が地方に回っていて、地方を面倒見ているという考えに対する鋭い指摘でもあります。都市は、周辺の農村や山村が有るからこそ成り立っているということを、経済の仕組みに取り組む試論であると思います。地方に対する発想の転換、市町村になかなか理解してもらえないもどかしさを語ってもらいます。

5. 最後に

様々な体験談や意見、考えが出てきます。

- ①技術士の社会貢献とは何か
- ②ボランティアは技術の安売りにならないか
- ③ボランティアに時間割いて大丈夫か
- ④ボランティアの技術の責任をどうする、等

私達は、「業務をする」ばかりでなく、「社会貢献をする」にももう少し意識を向けるべき時期にきたと、考える機会にしたいと思います。